

「血液型性格判断」はなぜ信奉されるのか

— 実験的「社会的認知」研究への一つの招待 —

村 田 光 二

一 はじめに

私が大学院の学生だった頃である。同じ研究室の後輩の学部学生から年賀状をもらった。その文面が私の目からみるとユニークだったので、今でも印象に残っている。挨拶事項はいっさいなく、以下のような文章が書かれていた。

社会学科では、院生にA型が全然いないそうです。やはり、あのような難しい学問には、一種のひらめきがあるのでしょうか(？)。ちなみに、私はA型でして、実験の道を見ようとするのは正解だったことになりました。実際、あの(中略)学問に適應できるほどの切れる頭がな

いのは、よくわかっていたことでした。社会心理学科の血液型マップはどうなっているのでしょうか、やはり実験系と社会系で二分されているのでしょうか。今年はこの仮説を検証します。

親学問である社会学あるいは心理学との対比の上で自分の立場を語ろうとすることは、社会心理学への道に足を踏み入れたばかりの学部三年生でなくとも、充分経験を積んだ研究者においてもしばしば見受けられる。しかし、血液型に応じてそれら学問間の区別を行うといった発想は、ほとんどありえないものであった。むしろ、あってはならないと思われた。

社会心理学を学ぶとほどなく「ステレオタイプ」と

いう概念を知ることになる。「紋切り型」と訳されるこの言葉は、社会的な対象、とりわけ「人種」「性別」といったあるカテゴリーに所属する人に対する固定的な見方を指して用いられることが多い。例えば「日本人は勤勉である」といった見方である。ステレオタイプはあくまでも見る者の心の内に存在するものであって、そのまま現実^①に妥当するものでは決してない。もちろん、一般論としては現実を映す鏡として妥当な場合も有り得る。問題となることは、個々の対象(人物)を認知する際に、ステレオタイプが枠組みとして(個々の特徴を捨象して)働いてしまうことである(これを「ステレオタイプ化」と呼ぶ)。

血液型と性格の関係もステレオタイプの一つである。心理学的にも医学的にも、現代の水準では両者には全く関連が認められない。^②しかし「A型は□□□□」という血液型ステレオタイプを持ってあるA型の人を見る^③ときに、その人も「□□□□」である^④と見てしまいがちなのである。若いとはいえ科学的研究を志そうとする者が、どうしてそのことに気がつかないのだろうか。

そういった小さな憤慨と落胆を、私は大人気なくその年賀状に感じた。

けれども、見方を次のように変えてはどうだろうか。科学的根拠がないにも関わらず研究者の卵さえ信じている事柄には、信じるにたる理由が私たちの側にあってはないだろうか。私たちの社会的対象の認識過程に、誤った信念を生み出す仕組みがないのだろうか。

実際、先の学生が特殊例でないという多くの経験をこれまでしてきた。私が初めて心理学の大学教師として教壇に立ったある私立大学でも、多くの女子学生が私の血液型に興味を持って当てようとしたり、求めに応じて「血液型と性格の関係」についての自分の知識を披露してくれた。中には「心理学的解説」(講義)を求めて来る者もいた。以前所属した国立大学では、学生に関する所見欄に「A型ゆえの細やかな心遣いをする」とある教官が書いていたのをたまたま目撃した。現在所属する大学でも、ある部署の少し以前の広報を散見していると、「血液型性格判断」をメディア利用と関連づける文章に目を奪われたのであった。

私たちはさまざまな誤った考えを抱きやすい。⁽²⁾「血液型性格判断」は東洋人特有のものだとしても、西洋人には「占星術」を信じている者が少なくないという。信じる内容は人それぞれだったとしても、信じるに至る先行条件と、信念が生成する認知過程には人々を通じて共通するものがあるのではないだろうか。

そこで本稿では、以上のような問題意識に立った私の研究も含めて、「血液型性格判断」が信じられる理由の解明に寄与する、実験方法を用いた社会的認知 (social cognition) 研究を紹介してみたい。これを通じて、社会心理学研究の問題意識と方法、そしていくつかの知見を読者に知っていただければ幸いである。

二 「血液型性格判断」がなぜ信じられるのか

「血液型性格判断」が信じられる理由に関しては、さまざまなレベルで議論可能である。まず、社会的水準では、発達したマスメディアの影響を指摘できる。いくつかの雑誌やテレビ、時には新聞が「血液型性格判断」あるいは「血液型性格関連説」を紹介し続けている

る。その元には、現代の血液型ブームのきっかけとなったといわれる書籍がある。これらを情報源として、多くの人は「血液型性格判断」についての知識を得るだろう。

このマスメディアの影響にしても、社会認知研究からアプローチが可能であるが、本稿の範囲を越えるのでここでは取り扱わない。⁽³⁾ マスメディアの影響に関しては多くの議論が必要であり、本稿のテーマと関係することでも「超能力や霊能力」に関する誤信の育成といった問題もある。また、メディアは一方的な報道をするだけでなく、批判的な報道も行い、「血液型性格判断」の流行をくい止める可能性も持つのである。

次に社会的相互作用の水準での議論が可能である。マスコミが報道するだけでなく、日常のコミュニケーションの中で頻繁に話題になることの影響も重大だろう。周囲の人が受容し話題にしていることが、この「判断」の信憑性を高めることになる。ここでは、たとえ信じていなくても相手の話題を否定しがたいといった問題、他に話題が乏しいといった問題等、日本の現

性 (representativeness)」に基づく判断と呼ばれる。しかし、いずれの系列もその生起確率は六四分の一で等しいはずである。

私たちは「ランダム」が一種の「でたらめ」であることを知っている。コイン投げを多数回行えば、裏表は半々ずつ出現し、しかも順序としては混在することを知っている。しかしそれは非常に多数回実施したときに保証されることであって、少数回の場合には偏った結果が出る確率は決して低くない。実際、全くの偶然で作成されている乱数表などでも、同じ数字が続くことがしばしば有り得る。狭い範囲だけ取り出すと、あたかも偶然ではないかのように見受けられる。しかし私たちは、少数のサンプルの中にも多数の母集団と同じ特徴を求めやすい(「少数の法則」と呼ばれる)。昔から「ギャンブラーの誤謬」という現象はよく知られている。丁(偶数)半(奇数)博打で、ずっと丁の目が続いた後には、半の目が出るのではないかと思いやすい。しかし、次に半が出る確率は、各回が独立の事象なので、いかさまでないかぎり、やはり五割であ

る。こういった偶然事象の特徴は、その道のプロたちもなかなか理解できなかったらしい。

以上とは逆に、ずっと「表(成功)」が続くとさらに「表(成功)」が続くと思われやすい出来事がある。スポーツなどにおける「波に乗る」といった現象である。確かに日本のテレビスポーツ番組を見ると、アナウンサーや解説者が「乗ってきた」と表現する場面にしばしばでくわす。いいプレーや勝利が続くと、次にまたいいプレーや勝利が生ずる確率が高まるように見受けられる。個々の事象は相互に独立の偶然事象ではなく、人間の技能が関わる事象であることから、こういったことがあってもいいように思える。しかし本当にそうであろうか。

ギロピッチたちはアメリカのバスケットボールでよく言われている現象「一度シュートが決まると続けて(5)どんどん決まりだす」を、データをもとに検討した。そうすると、連続してシュートが決まる確率が偶然以上のことは決してなく、各シュートの正否は直前のシュートの正否とは統計的には全く無関係であることが

べてA集団よりもB集団の方に帰属されやすかった(5.79 vs 6.21)。つまり少数派集団の望ましくない行動は実際よりも過大視されていたのである。「少数派」

は「多数派」と比べて人数も少なく目立ちやすい。「社会的に望ましくない行動」も少ない行動様式ということで、やはり目立ちやすいだろう。目立ちやすいもの同士の対は特に注目を引きやすく、選択的な情報処理を受けやすい。その結果よく記憶されて実際以上の頻度生起していた(「少数派は望ましくない行動をしばしばした」という回答が得られたと考えられるのである。彼らはこの現象を集団(のラベル)と行動傾向との誤相関と呼び、マイノリティーへのステレオタイプ形成の認知的基礎の一つであると指摘した。

この「B集団」が現実のアメリカ社会の中では人種的マイノリティー(特に黒人)に相当することはたやすく想像できるだろう。同様に、B集団を「血液型B型の集団」(あるいは「A B型集団」)、「望ましくない行動」を「変わった行動」(あるいは「二重人格的な行動」とすれば、実際にはそんな結びつきがなくても、

血液型ステレオタイプ形成の場合にも一部には適用できるだろう。

ステレオタイプがすでに形成されている場合には、その枠組みにそった形で情報が取捨選択され、記憶され、処理されやすくなる。ハミルトンたちもその後の研究で、例えば「ジョンはセールスマンで、礼儀正しく、話好きである」といった刺激文の提示を受けた場合には、「セールスマン」のステレオタイプにそった「話好きである」といった特徴の出現回数が、実際以上に多く見積もられることを示した。血液型ステレオタイプもこの情報を歪める働きをしているかもしれない。坂元が行った実験はそれを示している。⁽⁷⁾

彼は、被験者の女子学生に人物記述文を読ませ、その人物がA型またはB型にどれくらい当てはまるのかを回答させた。この人物記述文にはいわゆるA型的要素もB型的要素も含まれる玉虫色の内容であったが、その記述文全体を読む長文群と、三分の一だけを読む単文群とを設定して実験した。長文群では各血液型に一致する要素も多いが、不一致の要素も多い。しかし、

もし不一致の要素を無視し、一致する要素を中心に認知するとすれば、いずれの血液型への適合度を判断する場合も、長文群の場合の方が高く評定されるだろう。

結果はこの仮説を支持した。6点満点尺度でA型への適合度の評定は長文群の方が単文群よりも高く($M=3.99$ vs 3.74)、B型に関しても同様であった($M=4.39$ vs 4.11)。これらの傾向は統計的に有意であった。

この実験で興味深い結果の一つは、同一のあいまいな行動記述が、「A型か」とたずねられればそれに、「B型か」とたずねられればまたそれに、弱い程度であるが当てはまっていると思われる点である。血液型は生化学的に明確に確定できるカテゴリーであるのに対して、性格の類型は、たとえ充分よく考えた内容だったとしても、境界はあいまいで相互に重複しているだろう。むしろそういった類型化は不可能である、というのが現代の性格心理学の立場である。それに対して「血液型人間学」における類型化は、積極的に類型間の重複を許容し、誰でもどの類型にでも適合する面を持つように作成されている。私がある学生に書いてもら

った中には次のようなものがあった。「私はA型です。でも人から『A型ね』と言われたことがあります。それは私が『A型は神経質である』というようにみられたくないがために、それを隠してしまうほど神経質だからです」と。あたかもフリーサイズのTシャツのようなこの特徴は、大村によって「フリーサイズ効果」と名づけられている。「血液型人間学」が反証不可能な偽科学といわれる理由の一つである。

坂元は別の関連した実験を実施している。⁽⁸⁾これは「血液型性格判断」に関してあまり知識のない成年層(実際には放送大学生)の被験者に、その知識(先行刺激)を与えることをしたうえで、行動記述文に関する記憶の再生を求めたものであった。先行刺激には二通りがあり、ある人物が「A型の典型的な性格」あるいは「B型の典型的な性格」で、その具体的内容(いわゆる「各」血液型別の性格)を説明したものであった。行動記述文(「ある日の日記」)はA型的な記述が五つ、B型的な記述が六つ含まれた玉虫色のものであった。これを音声的に提示し、人物のイメージをまと

めさせた。その後、突然の課題として(偶発的に)、自由記述形式でその記憶内容を再生することを求めたのである。その結果、A型群ではA型記述の方を、B型群ではB型記述の方を、相手の群と比較してより多く再生したことが認められた。

この実験は血液型ステレオタイプを実験的に操作した場合にも、その働きが認められることを示している。この被験者たちは「血液型性格判断」をあまり信じていなかったが、それに関する知識を与えられると、その知識に適合する情報を記憶しやすかったのである。いわば与えられた「色メガネ」に則して情報を処理したわけである。しかも情報処理の過程は意識されていなかったと推測される。

(3) 行動の水準—選択的な情報収集

血液型ステレオタイプを知識として初めて知った人たちの中には、それを仮説として受けとめることも多いだろう。全面的に信じられるわけではないが、もっともらしく思え、自分の経験を通じて確かめてみよう

とするかもしれない。科学的に正当な仮説検証を実施できれば、「血液型」に関する仮説はおそらく葬りされるだろう。しかし、日常の仮説検証過程には確証的傾向が認められ、一度手にした仮説をなかなか棄却しないことが知られている。

スナイダーとスワンの研究では、対象人物に質問をしてその性格を推測するという実験に被験者を参加させた⁽⁹⁾。事前に対象人物に関する簡単な情報を受け取ったが、それには「内向的である」(内向性仮説条件)あるいは「外向的である」(外向性仮説条件)ことを示す内容が書かれていた。質問には、「外向的質問」、「内向的質問」、「中立的質問」の三種類があらかじめ用意され、その中から一定数を選択する形式であった。外向的質問は、例えば「パーティーを盛り上げたいとしたら、どうするか?」といったように、それに肯定的に何らかの回答することが「外向的である」ことを確認させやすいが、否定的に回答することが困難なものであった。内向的質問も内容は対照的だが同種類のもので、中立的質問は肯定的に答えられたとしてもどち

らの仮説も確認しないものであった。その結果、いろいろな状況を通じて被験者は、仮説に沿った質問を圧倒的にしやすかったことが認められた。つまり、仮説を確認する方略をとりやすかったのである。私たちが行った実験では、血液型ステレオタイプの

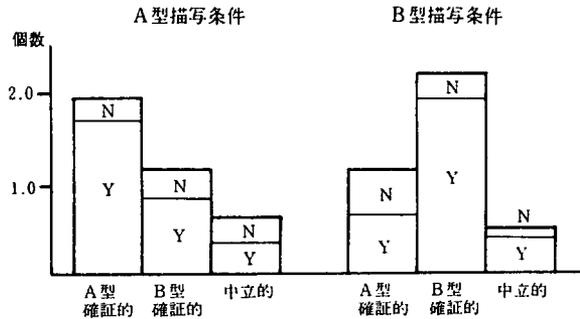


図1 質問選択と回答予想

注：図中のYは肯定的回答の予想、Nは否定的回答の予想を示す。
(村田・木下, 1993より)

場合でも同様の仮説確認傾向が認められた。⁽¹⁰⁾ここでは被験者は、「血液型がA型の人」のように自己紹介するビデオ番組か、「B型」のように自己紹介する番組を見た後に、その人物に質問する機会を与えられた。その結果は、図1に示されたように、A型描写条件ではA型ステレオタイプを確認する質問が選択されやすく、B型描写条件ではB型ステレオタイプを確認する質問が選択されやすいことが見いだされた。この実験のA型確認的質問には、例えば「自分をどう見ているか気になる？」などが含まれ、B型確認的質問には「何でもマイペースで行動しているほう？」などが含まれた。これらの質問に「はい/いいえ」いずれの回答を予想しているのかも調べたところ、図1のように肯定的回答を予想することが認められた。このように、「血液型と性格」に関わる仮説検証過程でも、やはり確認傾向が認められたのである。

確認的質問がなされると、対象人物の回答は仮説を確認する方向へと制約を受ける。たとえばパーティーを盛り上げることの不得意な内向的な人でも、盛り上げ

るためにしてみることがあるかもしれない。誰でもマイペースで行動することはあるので、そうたずねられれば「はい」と答えることがあるだろう。対象人物が対人的配慮に富み、相手の期待を裏切らないようにする傾向の強い場合はなおさら「ノー」と言えないであろう。対象人物がたとえ否定的な答をしても、反証として採用されることはめったにないかもしれない。

『何でも』がひっかかったので『いいえ』と答えたが、たいていの場合はマイペースに違いない」といった、あくまでも仮説に固執した解釈も可能である。

確証的質問に対する否定的回答は無視されて、肯定的回答のみで証拠として利用されたすいことも調べられている。XとYという二つの事象の関連性を問題にするときには、それぞれが「生じた」あるいは「生じなかった」場合を組み合わせた四種類の証拠を検討することが必要である。血液型が「A型」の人と「神経質である」という特徴との関連性をたとえ問題にするとしても、「A型で神経質である」人だけでなく、「A型でも神経質でない」人や、「他の型で神経質である」

人や、「他の型で神経質でない」人も検討する必要がある。ところが私たちは、XとYの事象が共に生じた場合に注目しやすく、他の場合は証拠として取り上げない傾向を持つ。その結果実際には存在しないX-Y両者の関連性を誤って認めやすい。「A型で神経質である」人が存在するというだけで、A型ステレオタイプを確信しやすいのである。

こう言った確証傾向は、実は大きな問題を秘めている。「仮説」だった現象を「社会的現実」にしてしまうことである。この問題は次項で論じよう。

三 「血液型性格判断」がなぜ問題なのか

「血液型性格判断」は、それを利用する人にとっては何らかの心理的機能を受け持っている。詫摩と松井は、流行の話題として人付き合いの補助的機能、占いと同性のように自分の運命や人の行動を予測する道具となる機能、権威体系に頼って複雑な思考判断を避ける機能の三つを調査データを基に指摘している。⁽¹⁾ 初めの二つの対人的機能に関しては、その後の多くの研究でも確

認がなされている。佐藤や渡邊は、現代の「血液型性格関連説」が相性の問題を論じて、対人関係を予測したり調節したりすることに役立つように見せかけている点を強調している。⁽¹²⁾ 小浜は、特に女性に流行する点に着目して、「血液型性格判断」は、思い通りには運ばない人間関係を、それでも納得しながら生き抜いていくときに必要だと論じている。⁽¹³⁾ このような対人関係の安易なマニュアル的機能の果たす限りにおいては、それはそれで許容されてもよいかもしれない。手相や占といったものが許容されているのと同様に。

しかし、「血液型性格判断」には大きな問題が潜んでいる。偏見と差別の問題である。ステレオタイプが認知の水準の概念であるのに対して、偏見はそれに否定的感情が結びついた態度の水準の概念である。そして差別は行動の水準の問題である。差別の前提には偏見があることが多く、偏見の基礎にはたいいステレオタイプがある。逆にステレオタイプが、偏見、差別を生み出すことは、人種的ステレオタイプの場合を見て明かである。血液型ステレオタイプの場合も、同

じ可能性を内包している。実際、血液型に基づいて教育方法を変える幼稚園の事例や、それを人事管理や配置転換に利用する会社の例が報道されたことがある。社会心理学の実証的研究の中でも、特定の血液型の人々が「性格が悪い」とされる傾向や、友人として忌避される傾向が示唆されている。これらは、偏見と差別でないなら何だろう。

「血液型性格判断」がなぜ信じられるのか、歴史的水準での議論も可能であった。「血液型と性格に関連がある」との主張は、悲しいことに、実は医学者、教育学者、心理学者といった科学者たちが一九三〇年頃に日本で行っていたものである。そこではひとまず誠実な検討が行われ、批判的報告が優勢となり、結局等閑視されたのであるが、その背後には強烈な差別イデオロギーが潜んでいたことが指摘されている。「血液型と性格」に関して綿密な社会史としての検討を加えた松田は、「ABO血液型は、白人が有色人種を差別するために使い、陸軍が兵隊の能力差別をするために使い、警察が犯罪者の差別として使い、学校が生徒の能力差

別に使った歴史」を持つことを強調している。⁽¹⁴⁾

あくまで「遊び」として「血液型性格判断」を話題にしている人からは、事態を深刻に捉え過ぎていると思えるかもしれない。血液型は外見から判断されることとはなく、日常実際に利用することは困難であることから、他の人種や性別の問題と比べて、偏見や差別が深刻な問題になることはないという議論も可能である。しかし、次の三点を事態の深刻さとして指摘したい。

詫摩たちが指摘した三番目の「権威体系に頼って複雑な思考判断を避ける機能」は、偏見や差別の問題と直接関係している。後の研究では、「血液型性格判断」を信じる者ほど認知的複雑性が低く、女性や外国人に対する偏見が強い傾向が認められたのである。こういった知見から思い浮かぶことは、「権威主義的パーソナリティ」である。権威に従う一方で、弱者に力を誇示することを本質的特徴とするこの性格は、ファシズムの基礎をなす社会的性格として検討されてきた。そういう性格が現代の日本に支配的だとは決して思え

ないが、「血液型性格判断」が青年層に広まる背後に、権威主義的志向性を生む社会的条件が醸成されているかもしれないと危惧されるのである。権威主義との結びつきの可能性、これが第一点である。

第二点は、血液型ステレオタイプが自己成就しかねないことである。現実には存在しなかつた社会的事象でも、皆がそれを信じて行動することによって、社会的現象となってしまう現象は、自己成就予言 (self-fulfilling prophecy) として知られている。例えば、かつて石油ショックの時代に「トイレットペーパーがなくなる」という噂を信じた主婦などによって、スーパーマーケットなどから実際にそれがなくなってしまうという騒ぎが引き起こされた。「この子はできる」と教師が信じた子どもが、教師の暗黙の特別の取扱いによって伸びるといふピグマリオン効果も知られている。先の仮説の確証傾向は、この現象に寄与する過程の一つを示している。性格の自己評定に関して統計的に分析した研究では、血液型ステレオタイプの場合にも、ここ十数年の間にそういった傾向が弱いなが

らも認められることを示している。

そしてひとたび信じられた血液型ステレオタイプは、なかなか改訂しきれずに維持されやすいことである。

近年では心理学者が、血液型ステレオタイプの解消を目指した実験を行い、一定の成果を収めている。確かに、授業時間等で論理的説得を受けた学生は、その直後には「血液型性格判断」に関する信念を放棄する方向に、かなり態度を変えている。しかし、教師―生徒関係を離れても、また長期的にも効果が示されるのかどうかは疑問であるし、説得に影響されない者も少なからず認められる。私個人の経験でも、「私の友人でずっとA型だと思っていた人が、生物の実験でB型と判明してしまいました。彼女血液型に擬っていてずいぶんショックを受けたみたいだったけど、今は何かというところ『あたしB型だし……』と言っています。態度もころっと変わってしまいました」というような話を教えてくれる学生は一人ではなかった。

一度獲得された信念は、たとえその成立の根拠が否定された場合でも持続されやすいことが、これまでい

くつもの実験で明らかにされている。例えば私は、デブリーフィング (Debriefing) という実験終了時の被験者への説明を実験操作に組み入れた次のような研究を実施した。⁽¹⁵⁾ この実験ではまず、「理系学生の自意識が高い」という信念を形成させるために、理系仮説条件では「理系で自意識の高い」学生と「文系で自意識の低い」学生の二事例を示した。他方、文系仮説条件では逆の「文系学生の自意識が高い」ことを示唆する二事例を示した。そうすると、被験者たちはたった二事例からでも、実験者がねらった仮説的信念を「一般的な予想」として形成した。その次に、「どうしてそういった専攻と自意識の関係が認められるのか」説明することを求めた。そこで実験は「終了」ということとして、「実験に関する説明」の用紙を読ませ、その中でデブリーフィング群では「先の二事例が全く架空であった」ことも説明した。非デブリーフィング群ではこの点にいっさい触れなかった。その用紙の最後に、「日頃の考えも調べたい」としていくつかの学部 of 学生の自意識得点の平均を予想させたのである。

その結果、理学部と工学部の予想点から文学部と経済学部の子想点を引いた値を指標とすると、仮説条件による有意な差が、デブリーフィングの有無に関わらず認められた。理系仮説条件では、その信念の根拠が架空であったと示された後でも、理系学部の方が文系学部よりも学生の自意識が高いと予測したのである。文系仮説条件では、その逆の予測が行われたのである。各条件への被験者の配置は、もちろんランダムに行われた。こういった信念の持続現象は、与えられた根拠を越えて、自分自身で事例を補強したり、その信念の成立理由を説明したりすることによると考えられている。例えば「友人の理工学部の◇◇は……」と思いついたり、「文系の人は読書が好きで、人の内面を考えることが好きだから……」と理屈づけたりするかもしれない。たとえその説明が「科学的」にはほど遠くても、自分なりに納得できるものならよいのだろう。何しろ結論は明示されているのだ……。

四 おわりに―認知の経済性とメタ認知―

私は本稿で『血液型性格判断』を信じる者は権威主義的で許しがたい」といったことを主張したいわけでは決してない。むしろ「信じる者」と「信じない者」といった人の区分をたてて人間を捉えることの危険性を伝えたい。「分ける」ことは確かに「分かる」ことにつながり、複雑な現象を理解可能にすることも多い。しかしカテゴリー化には個別対象の特徴を捨象することが必然的に伴い、重要な現実を見失わせることがある。どんな種類の社会的対象にも、個々の対象間には差異があり、人間には個人差がある。カテゴリーに基づく判断は、個人差を考慮に入れてもなおかつ、カテゴリー間に意味のある差異がある時に、初めて実行可能なものであるべきだ。

しかし、私たちが個人差を考慮し続けることは、非常に大変な作業である。自分のサークルの人たちを個人的に知っていたとしても、「(他の)○○部の人は……」と、一まとめで把握していることはないだろう

か。自分の所属する共同体的集団だけで生活がなりたっていた時代であれば、すべての人の個性を認識していたかもしれない。現代では数限りないほど多くの人たちと知り合い、相互に依存し合って生きていかなければならない。メディアが発達し、膨大な社会情報に接していかなければならないこれからの時代においては、すべて個人の水準で認知することは、実行不可能であろうし、実際的でもない。むしろある場合には集団の水準で認知した方がよいだろう。この時、ステレオタイプのような枠組みの知識は有用となる。けれども、それは固定的ではなく、柔軟性を伴ったものであるべきだろう。この意味を込めて私たちは、集団成員に関する枠組みの知識として「人カテゴリースキーマ」という用語を提案した⁽¹⁶⁾。

人カテゴリースキーマを用いれば、多くの場合自動的な情報処理が行われ、社会的な判断や行動が迅速となる。そういったいわば認知の経済性が、現代社会では求められていることも事実だろう。そうすることで、本当に重要な事柄に、充分な思考を費やすことが可能

となる。例えばどんなことでも理屈づけられるというような、ある意味では高度な認識作用、あるいは意識的な情報処理能力を身につけたために、他方で情報処理を自動化するための道具としてスキーマを身につけてきたといえるかもしれない。

重要なことは、いつ意識的に思考を働かせ、いつ自動的な認知に委ねるのか、それをコントロールする、少なくともモニターすることではなからうか。自分の認知過程を認知することを「メタ認知」と呼ぶ。メタ認知を磨くこと、あるいは自分の思考を反省的に捉えること、その重要性を指摘して本稿を終わりにしたい。なお、心理学とは人類の行う組織的で科学的なメタ認知活動とも言えるかもしれない。

(16) 本論文では必ずしもすべての文献を引用していないが、それらの多くは、佐藤達哉・渡邊芳之(1992)『現代の血液型性格判断ブームとその心理学的研究』、『心理学評論』、三五巻、二三四―二六八の包括的なレビューを参考にしている。また、本稿の問題に関しては、この領域の心理学研究の先駆者による、大村政男(1990)『血液型と性格』福村出版と、ジャーナリス

- ティックな視点で現状を鋭く分析した、大西赤人 1986 『血液型』の迷路』朝日新聞社も参考になる。
- (2) T・キロビッチ (中一雄・守秀子訳) 1993 『人間の信にすぎぬ』新曜社がこの領域の研究のたぐいより紹介となっている。
- (3) 池田謙一 1993 『社会のイメージの心理学』サイエンス社 がたぐいへん参考になる。
- (4) Tversky, A. & Kahneman, D. 1974 Judgment under uncertainty: Heuristics and biases. *Science*, 185, 1124-1131.
- (5) Gilovich, T., Vallone, T., & Tversky, A. 1985 The hot hand in basketball: On the misperception of random sequences. *Cognitive Psychology*, 17, 295-314.
- (6) Hamilton, D. L. & Gifford, R. K. 1976 Illusory correlation in interpersonal perception: A cognitive basis of stereotypic judgments. *Journal of Experimental Social Psychology*, 12, 392-407.
- (7) 坂元章 1988 『ABO式血液型ステレオタイプによる選択的知覚』『日本教育心理学会第三〇回総会発表論文集』六〇四一六〇五。
- (8) 坂元章 1989 『血液型ステレオタイプに関する知識』と記銘の歪み』『日本社会心理学会第三〇回大会発表論文集』二一九一三〇。
- (9) Snyder, M. & Swann, W. B. 1978 Hypothesis-testing processes in social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 1202-1212.
- (10) 村田光二・木下順子 1993 「仮説検証過程における確証傾向—血液型ステレオタイプに基づく場合—」『東京学芸大学紀要 第1部門 教育科学』第四四集、二一九—二二八。
- (11) 詫摩武俊・松井豊 1985 「血液型ステレオタイプについて」『東京都立大学人文学部人文学報』一七二、一五—三〇。
- (12) 佐藤・渡邊 前掲論文
- (13) 小浜逸郎 1990 「女性の血液型信仰を分析する」『婦人公論』七五巻、一二号、二七六—二八二。
- (14) 松田薫 1991 『血液型と性格』の社会史』河出書房新社。大村の前掲書も参考になる。
- (15) 村田光二 1983 「信念の持続と因果的説明」『日本社会心理学会第二四回大会発表論文集』三〇—三一。
- (16) 池田謙一・村田光二 1991 『こころと社会』東京大学出版会。この書物が本稿の基本的参考文献である。

(一橋大学助教授)